

from Kenya



ち40〜50%しか消化できず、約80キロをふんとして排出する。ふんの中にはさまざまな種類の植物の種がそのまま残されている。100〜3700平方キロもの範囲を移動するゾウは、ふんと一緒に草木の種をばらまいて、植生を拡大、多様化させるという、地域の生態系での重要な役割も担っている。



生き続けるアフリカゾウ。その姿を見て、子どもたちと一緒にこの問題を考えながら、彼らも野生のゾウのようたくましく生きていってほしいと願う。

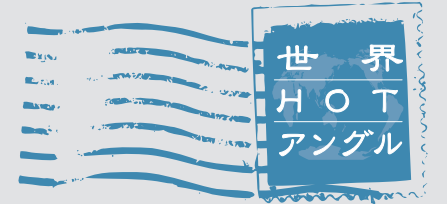


広大なサバンナで生きるさまざまな野生生物を見るバスツアーは、子どもたちに楽しいひと時を与える



手作りの教材を使って野生生物の生態や役割を紹介する筆者。子どもたちだけでなく、引率の先生も興味津々

「世界HOTアングル」では、世界各地でJICA事業に携わる皆さんからの投稿を募集しています。ご応募・お問い合わせは、jicagap-opinion@jica.go.jpまで。



地上最大の教材

広大なサバンナでアフリカゾウやキリン、シマウマなどさまざまな野生生物の姿が見られるケニアの国立公園。そこは、厳しい環境で暮らすケニアの子どもたちにとって、楽しくするための、「地上最大の教材」だ。



子どもたちに大人気のアフリカゾウ。バスツアーで必ず出会う動物の一つ

東京都よりも大きい国立公園

「ブオッ」。私の家は、ケニア最大の保護面積(東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県を合わせたくらい)の広さを持つツァポ・イースト国立公園にあり、夜な夜なラッパのようなアフリカゾウの鳴き声が聞こえてくる。

私の主な仕事はこの国立公園の中で、野生生物の保護に関する教育活動や、小中高生などを対象にした

バスツアーのガイド・授業をしたり、教材を作ったりすること。特に、なかなかバスに乗る機会もない、国立公園周辺に住む子どもたちは、園内の野生動物を見るバスツアーに大はしゃぎだ。

ただ、ひたすら広いこの国立公園、バスで園内を巡っていても、必ずしもお目当ての野生動物に出会えるとは限らない。そんなとき、私のガイドを助けてくれるのが、何といてもアフリカゾウだ。この国立公園には現在6500頭以上のゾウが生息し、アフリカ大陸に約60万頭といわれるゾウの1%以上がいる計算になる。どんなに動物が見られないときも、体重が6トンもある彼らの巨大な体は発見しやすく、今までガイドした中で見られなかったためしはない。

ゾウはライオンと並び子どもたちの人気動物で、ゾウが現れるとみんな一斉にバスの窓に張り付く。私への質問も、「どれくらい重い?」「何を食べているの?」「走る速さはどのくらい?」「妊娠期間の長さは?」「なぜこんなことを知れたがるのかしばらく謎だったが、どうも学校の試験に出るようだ」と、どんどん飛び出して来る。

野生生物と人間の共存のために

そんな人気者のゾウだが、国立公園の内外を移動しているため、時折近隣の村の畑に現れ、作物を根こそぎ食べてしまうことがある。また、2006年1月には集落のそばに現れたゾウが人間に驚いて、2人の村人を殺してしまうということがあった。公園の周りではこのような悲しい事故が毎年2、3件、起こっている。ゾウの出没する地域の小学生たちは、夕方4時ごろになると、皆一斉に家路につく。

1970年代、ケニア国内に16万頭が生息していたとされるアフリカゾウは、密猟の影響などもあって、05年には2万8000頭にまで減少。それに対し、69年に1094万人だったケニアの人口は、3200万人と3倍以上増加した。人口増加に伴う農地や居住地の拡大、家畜の放牧や森林伐採の増大が、野生動物の生息地や食物の供給源であった森林や灌木を減らし、人間と野生動物が接触する機会を増やしている。

一方、たった一頭で600種類以上の植物を食べるといわれるゾウは、一日に食べる200キロの食物のう